

第2回木曾地域の高校の将来像を考える協議会 会議録

令和元年7月3日（水） 午後6時00分

木曾文化交流センター 大会議室

【欠席】

加藤晋悟 長野県建設業協会木曾支部長

白洲 剛 木曾青峰高校PTA会長

上田浩之 木曾郡PTA連合会副会長

1 開会

2 あいさつ

○木曾町長 皆さん、こんばんは。大変一日のお仕事の後お疲れのところ、また遠路お出かけいただきまして大変ありがとうございます。第2回目になりますけれども、協議会でこれから御協議をいただくわけでございます。

それぞれ役職でお願いした関係もありまして、資料でもおわかりのように20人委員がいらっしゃいます。半数が第1回から交代されているというような状況でありますので、今日の次第にもありますように、まずは第1回のお話をもう一度繰り返して、御理解をいただきながらこれからの進め方の具体的などころについて御協議いただく形になろうかと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

第1回は1月23日に開催をさせていただきました。その後といいますか、その日に県の教職員組合、また高等学校の教職員組合の皆さんから要望書をいただきまして、中身的に公開をしてほしいとか、また委員については同窓会とか、または職員とか一般公募も含めて広く委員を選んでほしい、主なものはそういった要請だったと思います。いずれにしても、委員についてはこのような形で発足をしておりますので、具体的にさらにここへ追加するというのは、難しいと私は思っております。

規約ではごらんとおり、この協議会は公開をして行くと。皆さんの御意見で一部非公開にすることもできますけれども、基本的には公開でやっていくこととなりますし、協議の中身によっては傍聴の皆さんからも御意見をいただくというような、そんな手法をとってもいいのではないかなというふうに私は個人的に思っております。そういうときには皆様にお諮りをしながら、そういう手法もとりながら、でき

るだけオープンにいろんな皆さんの御意見をいただいて、最終的な方向づけに結びつけていけたらと思っておりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

いずれにしても、県へ出していく地域からの意見の取りまとめの時期も決まっておりますので、限られた期間でいろんな皆さんから御意見をいただくということで、物理的にも極めてタイトな時間の中でやっていかなければならないと思っております。いろんな皆さんから御意見をいただくということがまずは第一歩であろうというふうに思っておりますので、そんなことも含めて、今日の協議事項について委員の皆さんからも積極的な御意見をいただければ大変ありがたいというふうに思っております。

そんなことを申し上げて、開会の私の御挨拶とさせていただきます。どうかよろしくお願いをいたします。

3 自己紹介

4 第1回会議の振り返りについて

(1) 「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」について

○**県教委** それでは実施方針、高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針について説明していきたいと思いますが、それに先立ちまして、第2回の本曾地域の高校の将来像を考える協議会に出席していただきまして、まことにありがとうございます。

先ほど原会長さんから話もありましたように、20名のうち10名が新たに委員になられたということで、就任を承諾いただきまして本当にありがとうございます。また、継続の委員の皆様方におきまして、今後とも引き続きよろしくお願いしたいと思います。

私のほうからは、この冊子と概要版と資料1、この3つについてお時間をいただきながら、先ほど振り返りというようなこともあります。委員の方が10名かわっておりますので、改めてこの高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針について説明させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

まず初めに、なぜ高校改革が必要なのかと、その背景について説明をさせていただければと思っております。ここには2つありまして、1つは変化の激しい社会への対応が必要であること、2つ目は少子化の進行への対応が必要であること、この2つが背景でございます。

1つ目の変化の激しい社会への対応ですが、これは皆様御存じのように、AIと

かロボット開発や登場に見られるように、科学技術の進歩や技術革新により、これまでの仕事内容や働き方が大きく変わると言われております。

あるアンケートで小学校6年生でしたか、アンケートの中では、将来なりたい仕事な何といったら、第1位にユーチューバーというようなことを書いたというほど、社会がこれから大きく変わっていくと思われまます。

また、国境を越えたビジネスの展開や、インターネットの普及などでグローバル化や情報化の進展により、人、もの、金、情報が簡単に国境を変えるというような時代になってまいりました。

さらに、先ほど申しましたように少子高齢化というようなことで、社会保障費の増大とか生産労働人口の減少などというように、これまでの日本、我々が経験したことのないような状況がこれから生まれるのではないかと。

そのような社会において、どのように生きていくかということですが、やっぱり新しい発想、アイデア、個々の持ち味を生かす、皆が協働するといった中から新しい価値を創造していく時代になっていくのではないかと考えております。

このように、予測不能な社会、時代を生き抜くためには、今までですとこの仕事をやりなさいとか、こういうふうにやりなさいというような力、考え方で何とかやってこられましたか、これからは課題に気づき課題を解決する力や、いわゆる新しい価値などを見出す創造力が求められるのではないかと考えています。

今後におきましても、この後、両高校から具体的な説明があるかと思いますが、今までは知識を伝達することを中心とした学びに重きが置かれてきましたけれども、これからは、その知識の活用をしたり応用して思考力、判断力、表現力などを育成する学びが必要であり、蘇南高校、木曾青峰高校に限らず、全県の高校でもこのような学びの推進に取り組んでいる次第でございます。

このような変化の激しい社会で求められる資質、能力を育成するための学びを推進していくことが必要だということが、高校改革の背景でございます。

2つ目につきましては、お配りしました資料1をごらんください。旧第10通学区中学校卒業生数の予測でございます。この資料を見ていただきますと、もうごらんになっているかと思いますが、ショッキングといえますか客観的なデータでこのような数値になっておりますけれども、2017年には約210名おりました中学校卒業生数が、その後、増減は繰り返しながらも右肩下がりというような形で減少してまいりまして、2033年、現在わかっている直近のデータでございますが、約117名まで落ち込むということで、2017年の約56%となるという

ようなデータでございます。

この人口動態調査のデータというのは、かなり信憑性のおけるデータであるというようにことになっておりますが、2018年度、この地区の高校全体の募集学級数は6学級でございます。

先ほど今お示ししてあります中学校卒業予定者数の予測をもとに、2033年の募集学級数をシミュレーションしますと、117名ですので40人学級としますと、3学級程度になってしまうと。これはあくまでも試算ですので、必ずこうなるとは限りませんが、現在の3学級の減少、募集学級数の半減が見込まれるのではないかとということになっております。

今年度につきましては、木曾青峰高校が4学級、蘇南高校は2学級となっておりますが、3学級分に相当する中学生が減少するというものでございます。

少子化により学級規模の縮小化が進む中、これまでの学びを充実、発展させていく高校の配置が必要であると考えており、これが高校改革を行う2つ目の背景でございます。

それでは、実施方針のほうに移らせていただきますが、この実施方針の冊子とあわせて概要版もごらんいただきながら説明をさせていただきたいかと思っております。

まず、この概要版でございますが、左側のところには新たな学びの推進では、変化の激しい社会を生き抜くために求められる課題に気づき、課題を解決する力や創造力などを育成するための探究的な学びを推進してまいりたいと思っております。

また、中学生のニーズが多様化しますので、これまではどちらかという生徒が学校に適應する側面が強かったと思われませんが、これからは学校が生徒の多様性に應えていくという考え方を大切にして、総合学科高校、これは蘇南高校さんは総合学科高校ということになっておりますけれども、総合技術高校、多部単位制の高校など多様な学びの場やICTの活用の促進、これは電子黒板とか書画カメラというようなものでございますけれども、など多様な学びの仕組みを充実、拡充してまいりたいと思っております。

右側が再編・整備計画についてでございます。先ほどから言っていますように、少子化が進行する中で、現在の学校数を維持すれば、全ての学校が小規模化してまいります。

人口が多く集まりやすい都市部では、そのスケールメリットを生かすことができる規模の大きな学校を整備し、中山間地では学校が地域の拠点となっておりますので、小規模であっても可能な限り存続していくといった考え方が必要であると考え

ております。

そのためにも、都市部と中山間地で異なる基準を適用し、都市部と中山間地のどちらにも高校を存立させ、中学生の多様なニーズに応えられる多様な学びの場を適切に配置してまいりたいと思っています。

続きまして、実施方針の50ページをごらんください。この50ページは旧第10通学区、すなわちこの木曾地域の状況についてまとめてあるものでございます。第1期再編でございますが、そのこのイのところにまとめてございますけれども、この第1期再編は木曾高校と木曾山林高校を再編統合し、木曾青峰高校を設置しております。蘇南高校は総合学科に転換してございます。現在の高校配置は枠で囲ってある図のとおりになっております。

現在の状況と課題でございますが、先ほど説明したとおり、少子化の進行により、今後各校の学級規模が縮小していく状況にあります。また、隣接する通学区などとの流出入の関係は52ページの表にまとめてありますが、この地区から隣接する岐阜県の高校へ10名弱が進学し、一方、岐阜県の中学校からは15人程度がこの地区の公立高校に入学している現状がございます。この数値につきましては、2015年から2017年度の3年間の平均ということになっております。

なお、再編に関する基準につきましては、冊子の61ページをごらんください。61ページのところには、それぞれの都市部存立普通校、都市部存立専門校、中山間地存立校、中山間地特定校について書かれております。詳しくは、ここでは説明いたしませんので、ごらんいただければと思っております。

今後、学校規模の縮小が進み基準に該当した場合には、ここに記載しているいずれかの方策を検討していくことになるかと思っております。

ただし、この数値につきましては、2021年度、61ページの注のところにも書いてございますが、注1の2つ目のぼつ印のところに書いてありますけれども、2021年度、2022年度に2年連続してということになりますので、じゃあ来年からというようなことではございません。

さらに再度52ページのところに戻っていただきますと、③ということで再編計画の方向性についてまとめてございます。

次の2点、この地区の今後の少子化の進行を考えると、学級規模の縮小を見据えた地域全体の高校の将来像について検討を進め、中学生の期待に応える学びの場を確保していく観点から、地域の合意形成を図っていく必要があると。

木曾青峰高校は募集定員160名で、普通科、理数科、森林環境科及びインテリ

ア科が各1学級となっており、また、蘇南高校は募集定員80名で、総合学科2学級となっている。少子化が進行する中、どのような学びの場を構成していくか慎重な検討が必要であるという2つの観点を踏まえ、普通科と専門学科のバランスを考慮しながら、地域と密着した学びを強みとする中山間地存立校を配置していくことが考えられます。この地域の協議会では、この実施方針を踏まえて地域の将来を見据えた高校の将来について御検討をいただければと思っております。

この後、この通学区内2つの高校の学校長のほうから、各校の現状と課題について説明していただきますので、具体的な説明をお聞きいただきながら、この木曾地域の将来を担う子供たちのために、20年後、30年後を見通した地域の高校の将来像を皆様方とともに考えてまいりたいと思っております。

協議会の会長をお願いしております原町長様をはじめ、委員の皆様方にはこれから大変お世話になりますが、どうかよろしく願いいたします。

時間をとらせていただきましたが、私の説明は以上でございます。

○事務局 ありがとうございます。なお、質問につきましては、この後、旧第10通学区内の高校の現状と、それから全体スケジュールについて説明をさせていただいた後に受けたいと思いますので、よろしく願いいたします。

(2) 旧第10通学区内の高校の現状について

○木曾青峰高校長 それでは、よろしく願いします。ブルーの封筒の中の木曾青峰高校の資料をごらんください。昨年度、横野先生のほうからいただいた第1回目の資料に今の現状、一番最新の現状をつけ加えたものなので、今日から出席された方々には説明が必要かもしれません。

1番のところに各学科、課程の特徴ということで、主に進路状況で特徴を示しているかと思えます。数字が少ないのでごらんいただきたいと思えます。小さいものですから見にくいんですが、見ていただければもう非常によくわかるように、4大から就職まで全て進学先を持っている高校で、私もこちらのほうの学校に来て覚えた言葉として普職併設校という特徴が一番、これを見れば一目瞭然だなと思えます。

2番の学科、課程の課題ですが、これも来てすぐに数字を見て、どの科も書かせていただいたんですけども、定数に満たない状況になっているところが当然1番の課題かなと。ただ、今申し上げたように、非常に普職併設でバラエティーに富んで、それぞれの特徴がとてもはっきりしている学校だなということは見てとれるかなと思えます。

3番の課題克服なんですけど、今年、昨年度恐らく資料ではモデル校という言葉

だったんですが、名称が変わりまして、未来の学校という県の事業は名前が移行しましたが、県下で6校選ばれる中に選ばれました。本校のテーマはそこにかぎ括弧で書かせていただきましたが、高度な産業教育を推進する高校ということで、研究校に指定され、もう実は8月には計画書を出さなきゃいけないものですから、もうそれに取りかかっているという状況です。

現在、研究校で、今申し上げた8月の計画が認められると実践校に移るといことなので、まだこの未来の学校になったというわけではないですが、それに向けて今準備をしていると御理解いただきたいと思います。

そこに書いたように、高度な産業教育を推進する高校なので、木曾谷にある林業大学校と上松技専さんと、そのほかいろいろな地域の職業団体ないしいろいろな団体さんがいますので、そういういろいろなところと連携をして、究極というか将来的には地元産業の育成を柱にすることが高校というような計画書を今つくっているところですよ。

しかし、それを余り限定してしまうと、本校の普通科、理数科のほうの生徒たちの育成ということにも影響を及ぼしたいという思いがありますので、2番目のところに学校全体にこの未来の学校の課程で研究課題とするプログラム等を波及できないかというようなことも含めて今検討しているところですよ。

したがって、壮大な計画というか何というか、要は今さっき申し上げたように定員割れを起こしているんで、定員割れをなくし、なおかつ地元で産業人を定着させるような一連の流れを青峰高校の中の改革にして後押しするような克服モデルみたいなものを今つくっていると御理解いただければと思います。

表を見ていただければ一番わかりやすいと思いますが、どんどんと数が減っております。第2表のところの志願予定者数と入学者数になると、このたびの31の選抜のところで見いただければわかるように、入学者34、27、30、31で、40人のところをこのような数字で割っています。

学校としては、実はどこが一番着目しているかということ、30選抜のところの第1回志願者が61です。ところが31選抜では志願者が50に減っています。このところの減り方が、どのあたりに原因があるのかということ、今明らかにしようとして、それに対して具体的に対応していかなければいけないと考えているところですよ。

この間、地区懇談会がございまして、地域のほうに出ていきまして、お母さんとお父さんから直接お話を聞いたところ、やはり北部のほうでの郡外流出が増えてい

ることについては間違いないと今のところ思っているので、2つの方法、郡外流出を何とか減らせないか、それから郡外流入も増やせないか、そのようなことを青峰高校の今後の課題として位置づけて検討していくということです。以上です。

○蘇南高校長 それではお願いいたします。こういう生徒募集用のリーフレットの中に1枚A4のペーパーが入っておりますので、これをごらんいただきながら、私のほうで説明をさせていただきます。第1回目に説明したことと重複することが多くありますが、先ほどもありましたように、半数の方が交代したということで、もう一度丁寧に話をさせていただきます。

資料の1と2をごらんください。本校の創立から現在までの経緯について簡単に追ってあります。昭和23年に新制高等学校が発足しましたが、木曾谷南部にはその当時高等学校がありませんでした。したがって、現在の木曾町、当時の福島町の3つの高校へ行くか、あるいは中津川町、今の中津川市ですけれども、それから大井町、現在の恵那市、こういう高校に通うか、もしくはもう進学を諦めるというような状況でした。そこで、高等学校新設のための期成同盟会が結成されまして、木曾谷南部地域住民の悲願として昭和28年に組合立として本校ができました。

創立当初でございますが、普通科3学級規模でありましたが、我が国の高度経済成長とも相まって、商業のインナーコースを商業科に格上げしたり、あるいは翌38年には電気科を新たにつくったりということで、産業界や地域の求める人材を輩出する学校としてなくてはならない存在と、そのようになってきました。

この普通科3学級、商業科1学級、電気科1学級、合わせて1学年5学級、生徒数でいうと200名前後になります。全校生徒では600名余という時代が一番長く続いてきたわけですが、昭和の終わりごろ、全国、全県的に高校生は急増期であったんですが、木曾谷には既に少子化の並みが押し寄せてまいりました。

そんなことで昭和57年に木曾東、木曾西が統合されて、木曾高校が誕生している。それに並行するように、本校も普通科の学級減をしてまいりまして、平成9年には普通科、商業、電気、各1学級の募集という学校になりました。

その後も少子化の流れはとまりませんで、平成21年に2学級募集となる際に、3学科の特徴をそのまま生かせる形、すなわち3系列の総合学科高校に転換して現在に至ると。今の高校1年生が第11期生目になっています。

資料の3になります。総合学科に転換した平成21年度以降の入学生の状況ですが、ずっと2学級80人募集で来ているんですが、定員を満たしたことは一度もありません。特に平成24年からの数年間は、第1期高校再編時の再編基準、全校生

徒160名以下かつ地元中学校からの進学者割合が50%を切る年度が2回ありました。網かけをかけた部分ですね。これはもう蘇南高校の存続の危機だと、そんなふうに言われたわけですが、この危機に対して、地元南木曾町の支援を受けながら海外の語学研修を企画したり、バドミントン部の入部希望者の郡外から受け入れ、あるいは進路実現の保証等、学校の魅力づくりに力を入れてきた結果、平成28年度より入学者数が増加に転じておりまして、現在はその160名を超える数字というふうになっております。

隣接県協定というものがありますが、これによって岐阜県中津川市立中学校9校からの志望者も増えてきております。

資料の4のほうに行きます。普通科、専門科に続いて、第3の学科と言われる総合学科の理念がそこに掲載してあります。これは文科で出しているものであります。本校はかつてあった普通科を分離減、商業科を経営ビジネス系列、電気科をものづくり系列とした上で、総合学科の理念である生徒の主体的な学習、自己の進路への自覚を高めさせること、すなわちキャリア教育と言ってもいいかと思いますが、こういった教育活動を行ってまいりました。

今年の5月17日に教育再生実行会議が普通科の改革を盛り込んだ提言を行ったわけですが、普通科における類型化、コース制と言ってもいいかと思いますが、その一例として出されていたキャリアデザイン、国際的に活躍できる人材育成、地域との連携等は、総合学科高校ではもう既に当たり前のこととして取り組んでいるものでありまして、総合学科の先進性が証明されたと、そんなふうになるかと思いません。

課題を含めた本校の特色でございますが、まずは小規模校であることを逆手にとってのきめ細やかな少人数指導体制、これがあるわけでありまして。それから、高校は社会に直結する学校でありますので、進路指導にも力を入れてきておりますが、個別学習指導、言いかえれば生徒それぞれの希望に合わせたオーダーメイドの指導、支援体制で進学、就職、双方に生徒が流れるようになってきております。

昨年度は国公立4年制大学に3名の合格を出せたということ、それから就職においてもJR、アイシン等の有名企業がいいというわけではありませんが、世界的にも名前が知れた企業や、あるいは地元町役場、公務員への内定などをいただいております。

また、英語検定では高校卒業レベルと言われる英検2級に、昨年度3年生は5名、2年生は5名、1年生は1名、合計11名が合格しています。

今年度ですが、まだ1次の段階ではありますが、大学中級レベルと言われる準1級に1名合格しております、現在2次試験合格に向けて計画的に指導、勉強をしております。

ただし、一番このデメリットになる部分ですが、生徒会活動、特にクラブ活動においては、人数不足から助っ人を借りないと出場できなかつたり、他校との連合チームをつくらざるを得なかつたり、そういうスケールメリットを生かした活動ができなくなっていることも事実ではございます。

県教育委員会から出されている資料をごらんになっていただければわかりますが、木曾谷の少子化はますます進んでまいります。そのような状況のもと、活力のある学びのあり方を校内でも議論しておりますが、またこの協議会でも本校の将来像について忌憚のない御意見等を聞かせていただければ幸いと、そんなふうに考えます。よろしく申し上げます。

(3) 全体スケジュールについて

○伊藤幹事 それでは、資料は資料1の裏面になります。2ページにございます木曾地域の高校の将来像を考える協議会全体スケジュールということで、南木曾町教育長の伊藤ですが、説明をさせていただきます。

この表ですけれども、左側の真ん中に県教委のスケジュール、右側の列が木曾地域の協議会の会議日程という内容になっております。

県のスケジュールを見ていただきますと、中ほどに2020年2月から3月にかけて、再編・整備計画の1次分を策定するというようなスケジュールになっております。最終的には2021年3月に県全体の再編・整備計画を確定し、計画に着手して、2030年3月、令和12年になります。再編・整備計画を完了する目標ということになってございます。

これに合わせる中で、木曾地域の会議等の日程でございます。まず第1回の会議は今年の1月に開催をしております。3段目の第2回の協議会、本日の会議であります。当初のスケジュールの中では、今年の5月、先月までに開催の予定になっておりましたが、都合により本日の日程となっております。先ほど来出ておりますように、中心の団体、役員の方がかわられたということで、引き継ぎ等もありません。よかったとは思いますが、よろしくお願いをいたします。

今日の協議会、この後、この会の目的であります木曾地域の高校の将来像を考えていくことについて、郡内の各関係の機関、関係者の皆さんから幅広く御意見をいただくための意見聴取につきまして、この後、具体的に説明等をお諮りしたいとい

うこととございます。第2回の協議会としましては、意見聴取の内容についてお諮りする、そういったところをメインにしてございます。

スケジュール的には、今年9月までに意見聴取を行いまして、その内容を委員の皆様にお伝えするとともに、ホームページ等で公表していく、そんな内容ですが、非常にスケジュールがタイトであるということで、冒頭でも会長さんからもお話しをいただいているところでございます。

今年の10月から12月にかけて、この3回目の協議会を開催しまして、意見聴取の結果のまとめ、あり方等に向けた協議を行っていく予定でございます。場合によりましては、この4回目の会議の内容につきましてあり得るかと思えます。

その後、2020年、令和2年、来年ですけれども、2月から3月にかけて、木曾地域における高校の学びのあり方と具体的な姿、この案を作成しまして公表し、御意見をお聞きするパブリックコメント等を予定していくというスケジュールになっております。

その後、2020年、来年の4月から5月にかけて、また協議会を開いて、成案について御協議をいただき、9月には木曾地域における高校の学びのあり方と具体的な姿を策定しまして県教委に提言する、そんな運びに持っていく内容でございます。

繰り返しになりますが、左下、2021年の3月には全県的な再編・整備計画が確定というめどになっておりまして、2030年3月、令和12年に再編・整備計画が完了する目標というような流れになっている内容でございます。

大まかなこの協議会での日程につきまして、説明とさせていただきます。

○委員 1つ質問があります。青峰高校の校長先生の説明の中の課題克服のためにと
いうところで、1、2、3と挙げていただいたんですけど、3番目に郡外女子生徒募集の件とありますが、ここは具体的にどんなことを行うのでしょうか。

○木曾青峰高校長 説明を飛ばしてしまい申しわけありませんでした。実は今まで各学年七、八名程度だったんですけど、それが今、下宿生徒が増えていまして、もしかしたら寮ということが郡外から生徒を呼ぶ、方法の1つになるんじゃないかということをおもっています。

例えばお相撲の関係で全県から集まっておられます。それから、少しいろいろな問題を抱えていて、ちょっとその地域を離れて寮のあるところということで本校を選んでいらっしゃる学生もいます。

それから、例えばいろいろお聞きしてびっくりしたのが、今、天文部のところで

大きく活動してくれているのが寮生の子たちなんです。青峰の魅力というものと寮というものが結び付くと何か可能性があるのではないかと。

ところが、全員男子なんです。この数年お聞きすると、女子の方は全部お断りしているというので、何とか女子も例えば改築等で1階部分を女子寮にすると、一定程度女子の流入というのも見込めるのではないかということの研究をしていきたいということで書かせていただきました。実現するかどうかは別に、それからお金もかかることなのですが、寮は少し考えてもいいのかなと思います。

○委員 初回の会合から今回の会合につきまして、両校長先生から2校の歴史とか、それから現在取り組んでいる方法、いろいろ説明をしていただきまして、大変重要な2校だということは理解しておりますが、その中で先ほどお話しいただきました未来の学校という、昨年まではモデル校ということで期待をしておったわけですが、今年は認定されたということで、大変うれしいことだなと思います。

その中で、特にこの木曽地域には林業大学校、また上松の技術専門学校や、また地域によっては伝統的な産業、文化がたくさんありますので、そこと連携をして、しっかりと魅力のある、特色のある、学校をつくっていただきたいなど。大変いい方向へ進んできているなど実感するわけでございますが、その中で寄宿舍、木曽青峰高校に寄宿舍が男性のほうは完備しておるわけですが、私も青峰の旧山林高校の蘇門会の役員をやっていた関係で、専門科にぜひ昔行っていた全国募集もしていただいて、もう少し生徒を各地から寄せて、またこの地域に定着できるようなシステムにならないかなということで考えておりましたし、特に過去にもインテリア科で郡外の遠くから女生徒が通ってきたということで、非常に女子の住む寮の完備だということでございまして、女子生徒のおるところには男子生徒もまた多く来るんじゃないかなと思いますし、学んだ女子生徒がこの地区に定着し、また家族を持ったりしていただくと、非常に木曽の発展のためにはなるのではないかと思います。

そんなことで、今日この未来の学校につきまして説明を受けて、大変いい方向で私も大賛同でございますので、皆さん方でこれを盛り上げていただきたい。

5 協議事項

(1) 保護者や団体などからの意見聴取について

○会長 それでは、私のほうで進行させていただきますので、よろしく願い申し上げます。

今後のスケジュールもお聞きをいただいたと思いますけれども、後半にいろんな

皆さんから御意見をいただくということ、あとは協議会の議論の第一歩であろうというふうに思いますので、その方法について御意見をいただきたいというふうに思っています。

たたき台ということで、事務局のほうでつくっていただいた資料が3ページからありますので、まず事務局のほうから説明をお願いいたします。

○事務局 それでは、お配りの資料1の3ページをごらんいただきたいと思います。

3ページを見ていただきますと、1としまして目的が記載してあります。木曾地域の高校の将来像を考えるに当たり、さまざまな考え方や経験を有する住民や各種団体などから意見を聴取し、内容を協議会委員にフィードバックすることで第3回目以降の会議における議論に生かすということであります。

2の意見聴取の対象者、団体等については、4ページ、5ページをごらんください。保護者として、高校、中学、小学校の保護者を各学校から、高校については2名、それから小中学校からは1名ずつ推薦していただきたいと思っています。

また、その下の郡内中学校長については、7名の方をお願いをしていきたいと思っています。ごらんいただきますと、開田中学校長が入っておりませんが、協議会の委員に入っていることから、意見聴取者からは除いてあります。

その下、産業界につきましては、郡内の商工会、それから法人会、森林組合等から御意見をいただきたいと思います。

あと、協議会推薦団体として、青峰高校や蘇南高校に事務局があります産業教育振興会、それから木曾の教育を考える会、各同窓会からは各2名推薦いただき、計53名の方から意見聴取をしていきたいと考えております。

3ページに戻っていただきまして、意見聴取の進め方について記載をしてあります。全体の進行は事務局で行うこととしまして、意見聴取の進行につきましては、幹事の方をお願いをしていきたい、幹事が行うということであります。対象者には先ほど説明をしてあります緑の本の実施方針を事前配付しまして、地域等での高校の学びのあり方の検討の視点、これは24ページに記載してありますけれども、それに沿って意見をいただくということにしていきたいと思っています。所要時間につきましては、2時間から2時間半を目安とするということで、出席人数により変動するということでもあります。

大まかな流れとしましては、日程と狙いなどの説明で5分、それから自己紹介、高校改革の説明を県教委のほうからしていただくこととなります。④としまして意見聴取、1人当たり5分を見て10人くらいを想定しますと大体50分、休憩時間

10分とりまして、意見交換を40分開くと大体2時間10分といった内容になってくるということでもあります。

6ページをごらんいただきたいと思います。意見聴取につきましては、ごらんのグループ別で行いたいというふうに思っております。AグループからEグループの5グループに分けてありますけれども、AからCは保護者と郡内中学校長のグループ、Dのグループは産業界と産業教育振興会としまして、Eグループは木曾の教育を考える会と郡内の高校の同窓会としております。

中にはこちらが示した日程にどうしても合わない方がもう出てくると思いますが、そうした方についてはペーパーで意見をいただけるのであれば、意見反映をしていきたいというふうに今のところ考えています。

今日の会議を経まして決定いただければ、関係団体に7月下旬までに推薦をいただくよう依頼をしていきたいと思っております。

意見聴取の日程、それから開催場所については、県教委との調整がありますので、事務局に御一任いただきたいと思っております。

以上がこの将来像の検討に向けた意見聴取について、事務局からお示する案でありますので、御検討いただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

○会長 今ごらんをいただいて、なかなか即答というの難しい部分もありますけれども、私も事前にお聞きをして、若干個人的に思っていることを追加してお話をさせていただきたいと思っておりますけれども。

最初というか1つは、意見聴取の対象者、団体等ということで、一応人数まで含めて、たたき台としてこういう皆さんから御意見をいただくということで、ある意味指名方式かなと。

ただ、ここから漏れている皆さんからどういうふうに御意見をいただくかというところが、若干課題としては残るのかなと思っております。

もう1つは、僕はここの福島出身なので余計に思うんですが、先ほども学校の入学の状況もお示しになっていきますけれども、郡外へ高校進学される方もかなりいらっしゃるって、そういう皆さんがどうして郡外へ子供を出すのかとか、そういう御意見もある意味聞いてみたいなというようなそんな思いもありまして、この意見をお伺いに行く皆さんは指名した範囲でいいのかどうなのか。そのほかにいろんな関心のある方に出ていただいて、意見を述べていただくような、そんな時間を持つ必要があるかどうかということも含めて、少し御意見をいただきたいなというふうに思っています。

また、この意見を伺うのは、先ほどの今後のスケジュールでいきますと、9月までということですので、正直言ってもう今日は7月ですので、7、8、9と3カ月しかないわけですね。しかも、8月というのはお盆があつたりして、非常に時間的には厳しいというふうに思っています。

また、意見聴取の進め方の中で、全体進行は事務局でやって、意見聴取の進行は幹事が行うということですので、私の解釈では、意見を伺う方は、この幹事会、いわゆる各町村の教育長の皆さんにお願いをするのかなど。そうすると、私もこちらの委員は幹事の皆さんが意見を聞いてきてまとめたものを聞くというような、そんな形でいいのかどうなのかということも1つありますし、今日、県教委のほうからも、駒瀬さんと宮澤さんがお見えですけれども、そういう場合に、県教委の皆さんの参加、出席をどうしていくのか。県教委としてのお考えもお聞かせをいただければというふうに思っています。

また、各町村の教育長もこの夏場というのは非常に忙しい時期ですので、5グループに分けるということですので、6町村の教育長がそろってやるのか、それを何班かに分けてやるのか。それによっても、もっと言うと多分何班かに分かれて、例えば2人とか3人くらい、2班とか3班くらいに分かれないと、多分日程が非常に厳しいんじゃないかなというような、そんな気もするんですけれども、ちょっと原案のたたき台を伺って、そんな感想を持ちましたけれども、どこからでも結構ですので、それぞれの皆様、委員の皆様からの御意見を出していただけると思いますので、お願いいたします。

○委員 対象者のところですが、原町長が言われたように、郡内に住んでいるけれど出て行ってしまった方の意見というのはぜひ聞きたいなと思いますし、それと逆に、郡外から来ていただいている保護者の方にも入っていただいて、外から来ていただいた、何に魅力を感じて来ていただいているのかというようなところも聞いていただければと思います。

○会長 ありがとうございます。ほかはいかがでしょうか。どうぞ。

○委員 すみません、先ほど資料をもらったんですけれども、蘇南高校の場合は流出度というのがパーセンテージ的に南木曾中学校から蘇南へのパーセンテージが20%以下というのがわかるんですけれども、青峰高校さんの場合は、たくさんありますね。流出度というのはどのくらいあるのかなということと、今言われたように申しわけないですけど、進路指導の先生もいると思うんです。その先生というのは子供たちから多分一番意見を聞いたり、不安なことなどたくさん聞いていると思ひ

ますので、進路指導の先生方ともし連携がとれるようなら、その情報がわかれば、この協議会でも。

今、外から来る人もそうですが、流出が例えば今、2033年に117名というのがあるんですけども、これが流出した場合には以下になるということによろしいですか。

今現在の人数だけですよね。流出した場合は、これより減るのではないかと思うので、それを食いとめるというか、そういうようにならないように、地元から地元の高校へ行けるような、魅力ある学校ができればいいかなと思いました。進路指導の先生方との連携も一応させていただいて、要は流出理由が何かということなので。

○会長 進路指導というのは、中学校の先生ということでもいいわけですか。

○委員 そうですね。先生の指導の仕方によっては、こんなことを言うては失礼ですけども、どこに行くかわからない。そういう場合もあるので、そんなものをやりちょっと聞きたいなと思いました。

○会長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○山瀬幹事 すみません、今、会長から幾つかの御指摘があったんですが、きっちり決まっているところと決まっていないところが事務レベルでの話で、県の教育委員会はそれぞれの会合に参加をしていただくというふうにお伺いしております。

それから、幹事がという話ですが、進行していくのは教育長6人いますので、全ての会に全ての教育長が出るわけではなくて、都合を聞きながら、進行役ですので、誰か教育長が参加をする。また、常に全ての教育長が1つの会合に出るわけではありません。

日程については、逆算していくと確かに9月でありますけれども、一応10月から12月にどこかで第3回目、そこが一番大きな争点になるというふうに思っています。一応日程を極力調整していった間に合わせるという形ですが、記録、こうしたものを全てペーパーにしなきゃいけない時間もあるので、非常に厳しいというふうには思っておりますが、極力手分けをしながら進めていきたい。

ですから、結局はそうやって日程がうまく行って合うかどうかわかりませんが、極力、できることであれば今年度中に3回目だけではなくて、状況が合えば4回も、その状況によって開催をしなければいけないというふうに思っております。

郡外の高校への状況については、済みません、想定を全然していなかったものから、今後、事務局レベルで検討していきたいと思っております。

それから、五十何人という大勢の方から一応お聞きをするというふうに考えてお

ります。御意見はたくさんあると思っておりますが、回数をこなして行って、たくさんの方からというわけにはなかなかいかないと思っております、最終的に提案というか意見、この協議会を開いてみて、どういう形で取りまとめていくかということもありますので。

今、上伊那のほうでは最終的な意見を募集してみたいな形でやっていますので、ほかに御意見のあるような方ですとか、ある程度の提言の素案みたいなものができたところで、意見を募集して、パブリックコメントみたいな形で意見を聞かせていただくというようなことを今考えております。

事務的な点として、今の御回答できる範囲は以上でございます。

○**会長** ということですが、いかがでしょうか。5グループに分けるから、5日間でやるということか。

○**山瀬幹事** 土曜日とかに1日2回ということも。まだちょっと日程の調整ができていませんが、そういう可能性も。ただ、平日出れる方、出れない方もあると思いますので、そこら辺をちょっと踏まえて、1日2回の可能性もあるかもしれません。

○**会長** どっちにしても、5会場ということ。

○**山瀬幹事** そうです。

○**会長** 私どものこの協議会もこういう時間帯にやっているわけですし、この意見をお伺いする時間帯も多分、一般的にはこういう時間帯でないとなかなかお集まりにくいのかなと。

今、私どもの教育長が申しあげましたように、休みの日、日曜日とか土曜日とか、そういうときにまとめて、例えば午前、午後と2会場でやるというような、そういう方法もありかなということのようなんですけれど。

傍聴の方でどんな御意見でしょうか。

○**傍聴者** ありがとうございます。原会長さんが冒頭、傍聴者の意見ももしあればということ言っていただきましたので、1つ提案ということをお願いしたいと思います。

たくさんの方の意見を伺っていただくというのは、大変素晴らしいと思います。5会場ということで、なかなかその日程調整も厳しいとは思うのですが、中学校側からどのように進路の希望、流出とか流入とかという意見を聞いたりする、それはもったもだと思うんです。

やっぱりその意見の中には、高校がこれからどうあってほしいということが中心になると思うんですね。それぞれのこの地域の2校の現在の様子ということが一体

どうなのかということも、やっぱりその議論の中で出ると思うんです。であれば、学校長さんに全部出ていただくのは大変なのかもしれませんが、学校の職員をその会議に参加をさせていただいて、質問等があればそれに答えるような形にさせていただくと、より深まるのではないかなというふうに思っております。御検討いただくと大変ありがたいです。よろしく申し上げます。

○会長 ありがとうございます。そういうことは可能でしょうか。

○蘇南高校長 学校の内容が問われる、それは当然私どもがお答えしなければできないことだと思いますので、要請があれば出ていくことはできると思います。

ただ、やはり基本的には私ども2人が出ていくと、職員ではなくて。やはり何と申しますか、発言したことが青峰高校の意見である、蘇南高校の意見であるという形になってしまいがちなので、その辺のところは一職員にそういう責任を押しつけるということは、私どもはできませんので、基本的には学校長2人が出ていくという形がいいかと思えます。

○会長 よろしいでしょうか。

○山瀬幹事 事務局からですが、上伊那もそれぞれの意見聴取をするところに高校の校長先生が参画をされております。ですから、まだ事務局で校長先生にどうしても出てくださいというふうに御相談をしていないので、今どうということは申し上げられませんが、また御相談しますけれど。

やはり、質問に答えている場面が幾つかあって、ですからそれは学校の回答として出させていただく形になるので、できれば校長先生にお願いしたいというふうに今のところ考えております。

○会長 そのほかいかがでしょうか。あと私がもう1つ気になっているのは、日程の関係もありますけれども、どこでやるかということがありまして、距離的には今日の福島へおいでいただくのは、北からも南からもちょうど真ん中辺かなということ、私どもか上松という、場所的にはそういう話になるかなというふうに思っていますけれど、ただ、高校のあるところと申しますと南木曾町もありますので、場所もやはり参加していただく皆さんによって、開催場所も若干やっぱり工夫していかないと集まりにくいかなというふうな思いもありますけれども。

○委員 変な質問なんですけれど、2030年に再編ということが完了するということが伺ったんですが、2030年に高校に実際に入るお子さんの保護者の方は、この協議会には参加しないんですね。対象になる方もいらっしゃるでしょうけれど、意見聴取の対象としては入らないんでしょうか。人数的に難しいですか。

○山瀬幹事　そこら辺も検討しなきゃいけないと思っていますけれど、果たして現在例えば保育園の保護者の方が高校のことを真剣に今考えているのかというのがあって、ちょっと今どうという御返事はできませんけれど、そこら辺がきっちりした意見を出していただけるのであればというふうに思いますけれど、そこはちょっと何とも。また、小学校の校長先生たちともいろいろ相談しながら、メンバーをどうしようか考えていこうと思っています。

○委員　私も青峰高校に平成のときにもここにいましたし、ただ何かもう決まったことで、うちの子はそこに入るという感じがあるんですね。その前段階でわからないなりに少しでも参加できたら、もうちょっと違うことが考えられるし、もうちょっと違う意見も1つでも出たらいいのかなと思って提案させていただきました。ありがとうございます。

○会長　どうぞ。

○委員　先ほど進路指導にかかわる職員のことがお話に出ました。進路指導の仕方によって高校がというようなお話もちょっと聞かれたんですが、私も長らく中学校の教員をしてきましたけれども、自分自身は子供と親の希望、それが第一でありまして、相談には当然乗ります。また、高校選択で迷っていた場合もアドバイスはしますが、教員の立場として、こちらへ行きなさいよとか、そういうことは一切ありませんので、それはまずないということを最初にお願ひしておきます。

各小学校と中学校の保護者1名が現状意見聴取者で伺っておりますけれども、どういう保護者の方を充てるのか、ちょっと考えていかないといけないなと思いますが、基本的にはあて職の方にお願ひをするのが一番いいのかなというふうに思います。

ただ、この会として、先ほども出ましたけれども、なぜ郡外の高校を選択してしまうのかというような、生の声を聞きたいというような意向に果たして選んだ方がお答えできるかどうか。うちの子は青峰高校なり、蘇南高校を当初から希望していますよという親になってしまう、そういう傾向があると思うんですね。

中学校のほうでは、毎年、進路指導主事もしくは3学年の学級担任が子供の声、悩み等々保護者の意向も聞いて、こんな傾向にあるということは把握しておりますので、もし直接会議に出席をしなくても、こういうことで、こういう事情で郡外の高校を選択していったという、そういう例といたしますか、声を集めてこの会に資料として、それぞれの学校幾つか挙げてもらうという、そういうことはできますので、それでよろしければそういうことは可能かなと思います。

○会長 ありがとうございます。ほかに御意見いかがでしょうか。

○委員 スケジュールの関係でちょっとお尋ねをしたいと思いますが、2ページをごらんいただきたいと思いますが、2020年の4月から5月までに第5回の協議会を行って、その後、9月に提言をし、また2021年の3月に再編の整備計画が確定をするということでありまして、それから先ほど話が出ました、2030年の3月までに再編の整備を完了するというふうに書いてありますが、この間、9年間もあるんですね。

その間の整備計画を確定したその進捗状況だとか、また不慮のいろんなことがあって、この整備計画をどうしても変更しなきゃいけないよというような事態があった場合の想定もしているかどうかをちょっとお聞かせください。

○県教委 2020年再編・整備計画が確定した後、再編・整備計画の完了までの期間ですが、これは再編・整備計画が決まった後、再編・整備計画というのは県教委のほうで、この協議会の御意見を最大限尊重しながら再編・整備計画を確定してまいりますので、その2030年が一応再編・整備計画の完了となりますけれども、再編・整備計画に基づきまして、各学校の整備を進めていくということになるかと思えます。

○委員 その経過の報告等々は中途ではしないということでしょうか。

○県教委 そうというような御意見も実際に上伊那のほうでもございましたので、そういうことについては、また検討させていただくということになるかと思えますので、よろしくをお願いします。

○委員 ありがとうございます。

○会長 そのほかはよろしゅうございますか。

いずれにしても、日程的にはそれぞれの各町村の教育長なり、先ほど話に出ましたけれども、高校の校長先生方にも御出席をいただく。また全会場に県教委からもおいでをいただくということでもありますので、これはもう事務局へお任せして、対象は今日リストとして挙げた皆さん、先ほど先生からもお話がありましたけれども、1名の代表をどうやって選んでいくかという部分は非常に、会長さんとかある程度あて職でお願いをしなきゃいけない部分だろうというふうに思いますが、そんな形で幹事会のほうへお任せして進めていただくということでもよろしいでしょうか。

先ほど私が申し上げましたように、ここに漏れてしまっている皆さんから御意見をお聞きをする機会をつくるかどうか、ある程度原案ができてからのパブリックコ

メントというそんな機会もございますけれども、できるなら意見を言いたいという人も多分、大勢いらっしゃるのではないかなというふうに思っていますので、そういう機会も若干どこかでちょっと幹事会の中で今後御検討いただくということも含めて、大筋では今日事務局がお示したような形で進めさせていただくと、会場も含めてですね、そんなことでよろしゅうございますかね。

それでは、こんなことで幹事会の皆さんは大変日程的にも、通常の業務に加えて大変忙しい中であらうかと思いますが、よろしくお願ひ申し上げたいというふうに思います。

では、その他は何かありますか。

○**会長** 事務局のほうでは、その他特にないようではございますけれども、委員の皆さんのほうから何か協議をこの際しておいたほうがいいんじゃないかというようなものがありましたら、お出しただけならばと思いますが、いかがでしょうか。よろしゅうございますかね。日程なんかは、委員の皆さんにも事前に。

○**山瀬幹事** 日程とかは決まれば御連絡します。

○**会長** 1番の意見聴取の関係の日程については、決まり次第、事前に委員の皆さんにも調整をさせていただきますので、出席できるところへはぜひ積極的においでいただければありがたいなかなというふうに思っておりますので、そんなところで本日の協議事項を閉めてもよろしいですか。

○**傍聴者** すみません、傍聴者です。発言してよろしいですか。

○**会長** はい。

○**傍聴者** 青峰高校をつくるときに、その構想等、県教委からの担当教諭としていろいろな面、仕事をやった者なんですけど、この地域の教区は難しいですよ。

長野県で北部のほうにも学校は幾らでも、統廃合している飯山のような地域もありますけれども、それから反対では白馬みたいな地域もありますけれども、これだけ広い地域で、しかも木曾東高、木曾西高、木曾高校、ずっと青峰高校まで、これだけたくさん編成を経てきて問題を抱えた地域はほかにないでしょう。

それをここのスケジュールを見たら、他の地域の同じスケジュールに県教委が当てはめて、さあ結論が出ますよと。これはないですよ。

ほかの学校は、例えば長野南だとか田川高校だとかが新設している時期に、ここではもう木曾高校という統合が始まっているんですよ。十数年の速さを持って進んでいるんですよ。

だから、もっと早く対策を打ってしっかりしたことを出せば、県教委の皆さんを

非難しているわけじゃないですが、県教委の皆さんもころころかわるので、もうちょっと早く長野県の過疎地域の高校の対策と方針とか、こういうものをベースにするべきだというものを県教委が提起する時間がいっぱいあったはずですよ。それが遅れに遅れて、木曾の場合は最先端だったものだから、県教委の方針が遅れに遅れてしまって、これは県教委も難しい話ですよ。地域の不安、そういったものもあるし、なかなか難しい話なんですけれども、遅れに遅れてしまったと。

こういう難しい地域の学校のことを、他の地域のスケジュールと当てはめて、じゃあ3月までに再編・整備計画を出しなさい、これはちょっとむちゃじゃないですか。

この地域がどんなふうな高校をつくるかということは長野県では例がないので、こういう地域にどんな高校を想定していくかという構想とか例はないんですよ。だから、意見を聞いてまとめたというだけで、こうですよ。それで、ほぼ教育にはかかわっていても保護者の方なんかは自分の子供のことだけだし、産業界の方だったら就職だとか、そういう経済方面からだし、そういうばらばらな方面の人たちの意見を聞き取って、それを全部まとめてさあ出しなさいというのは、これはちょっと申しわけない。きつい言い方だけれど、県教委としては無責任です。

木曾は本当に長野県の中で一番難しい地域です、これは。いろいろ私も教員をやっていたので、ほかの地域も見ていますけれども、過疎地域の中でも最も難しい。しかも、しっかりした高校を展望しなければいけない地域です。ですから、これは3月には無理です。

これだけの意見を聞いても、日程が詰まって一生懸命詰めて、教育長の皆さんも分散して聞くなんていうことをやっていちゃだめですよ。みんなの意見を全部聞いて、トータルして吸い上げていかないと。それくらいの努力が必要なんです。

いろいろ文句を言っていますが、1つだけお約束していただきたいのですが、確定というのは、こうだというものを出すものではないと。例えばこういう方向、こういう方向、こういう方向、いろいろな可能性があるという多面的な形で確定するということを残していただきたい。そうしないと、今一番難しいこの地域の高校のかじ取りを間違えたらどうするんですか。木曾の場合は間違えてはならないんですよ、生徒の減り方がすごいので。しかも例えば松本の松商だとか県だとか深志だとか、1年生300人募集とかね、松商だったら340ですか、370でしたっけ、商業科を含めると。でも、ここの地域の何倍かあるわけですよ、それだけで。

ここは松本地区の1つの一学年の生徒よりも少ない人数で、それで高校をつくっ

ていかなきゃいけない。データも必要で、いろいろな共通認識も必要で、そういうことを考えると難しいので、ひとつお願いしたいのは、確定というのはこうだというものを出すという努力をしないということ。それをお願いしたいと思います。こういう案、こういう案、こういう案が出たというまとめ方でもよろしいと。それはぜひ教育委員会の方には、担当者の方には覚えておいてほしい。よろしいですかね。お願いします。

○**会長** ありがとうございます。それは私ども協議会のほうへ課せられている大変大きな課題だというふうに思っていますので、それはやはり私ども一人一人も意識をしながら、今後この協議会としてどういうふうにまとめていくのか、そういったところだと思いますので、そんなことで今の御意見はしっかりと受けとめていきたいと思っておりますので、よろしくをお願いしたいと思います。

○**事務局** ありがとうございます。協議事項のほうはこれで終了させていただきたいと思っております。

6 その他

特になし

7 閉会

○**事務局** それでは、第3回の会議は10月から12月を予定しております。日程調整をし、追って通知をさせていただきますので、御承知おきいただきたいというふうに思います。

それでは以上をもちまして、考える協議会第2回を終了させていただきます。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

午後 7時40分 閉会